

書評01

玉岡 かおる 著

『春いちばん
—賀川豊彦の妻ハルのはるかな旅路』家の光協会 / 2022年10月刊 / 496ページ / 1900円+税
ISBN 978-4-259-54779-0評者：杉 典生
研究所個人会員

これは賀川豊彦の妻、ハルの物語である。賀川豊彦は明治・大正・昭和を通じて、キリスト教の伝道や貧困問題、労働運動、生協運動、農民運動などを行ってきたことで知られている。が、ハルについてはいくつか評伝はあるものの、その存在はあまり知られていない。作者玉岡かおる氏は「お家さん」「負けんとき ヴォーリズ満喜子の種まく日々」など歴史小説を多数執筆されている。この小説では、賀川豊彦という「貧民窟の聖人」に寄り添っていくハルを生身の人間として描きたかったという。彼らの生きた時代ははるか昔であり、知る人も少ない中で、史実をもとにしながらハルという人物の生き方や考え方を読者に伝えてくれる。小説形式なので、わかりやすい文章でハルの心情や葛藤が綴られている。また豊彦が多数執筆した著作などもなかなか手に入りにくい今、本書で彼の業績を知ることができる。ぜひ多くの生協関係者に読んでほしい作品である。

賀川ハルは明治21年3月16日に横須賀で生まれた。春一番が吹く頃だったので、寒さを吹き飛ばす思いをこめてハルと名付けられる。もともとは藩士を祖父にもつ家柄であったが、思わぬ事故で家を失い、両親と姉妹4人が一間しかない家で細々と暮らしていた。ハルは利発な子で、向学心にあふれる娘だったが、貧困のため女学校には進学できず、小学校を卒業すると東京に女中奉公に出される。その後、叔父の援助で憧れの女学校に通うことになるが、同級生

のいじめなどで途中退学する。ハルは一家ともども神戸に移り住み、叔父の工場で女工として働くようになる。23歳になったころ、街角でキリスト教の説法をしている青年賀川豊彦を知る。大正元年にクリスチャンとして洗礼を受け、豊彦と結婚し、様々な葛藤を乗り越えていく…というのが簡単なあらすじだ。

内容を大きく分けると、希望と挫折を繰り返す少女時代、転機となる豊彦との出会い、そして従属した女性から自立した人間への成長、となるだろう。

ハルは小学校卒業後、奉公に出るが、当時としては普通のことだったろう。女学校に進む者はごく限られていた。しかし、ハルの家は質屋を構える裕福な家だったが没落してしまうことになったため、女学校へというコースから外れてしまった。叔母の娘が女学校に進んでいることに羨みもあったと思う。そうした中で女中奉公に出るということは向学心の強いハルにはそれなりの口惜しさがあったに違いない。

奉公中に作家志望の女性と盲目の少女に出会う。女性が作家になる、目が見えなくても必死に働いている、作者はこのエピソードを通じて、ハルの内面にある誠実さと挫けない心を描きたかったのだと思う。他方、念願の女学校に通う場面では、いじめられても言い返せず、内にこもってしまう。ここでは芯をもちながらも、まだ迷いのあるハルの思春期がはがゆいほどに描写されている。

この小説の白眉は豊彦が拠点にする神戸新川の有様であろう。日清・日露戦争ののち、神戸は好景気に沸いていた。港湾や造船所が立ち並び、地方からも多くの労働者が集められていた。しかし事故にあったり、病気になったりすると職場に復帰することもままならず、安い長屋に暮らすしかなかった。当時新川はそうした貧民街の代表とされる場所であった。ここで豊彦は狭い長屋の一角で教会を開き奉仕活動を行っていた。

豊彦に魅せられたハルは活動に参加する。しかし活動は思っていたより大変であった。病気で臥せている者の介抱や下の世話をしたり、食うに食えない住人へ食事を配ったりする。中にはアルコール中毒で暴力に及ぶ者もいてハルも被害にあう。

ハルはそういう奉仕活動を通じて洗礼を受け、豊彦と夫婦になる。奇しくも豊彦はハルと同じ年に生まれている。両親が早く亡くなり、叔父に育てられるという経験を経て、キリスト教に入信し、伝道者を志し神学校に入学。在学中からこの新川に住みついていた。ただ、豊彦と暮らすということはひたすら自我を押し殺し、神に仕えることと同義であった。

豊彦はこの作品の主人公ではない。ハルの物語なので、それほど彼の内面は描かれていない。作者はキリスト教の理念と実践を行い内外で高い評価をうける、完全無欠な人物として登場させている。自分のものは他人に分け与えるという教えを忠実に生きている男である。この物語で豊彦の人間らしさが垣間見えてくるのは終盤になってからである。

ともあれ、豊彦と一緒にしたハルは、さすがに彼の行動になかなかついていけない。クリスマスにハルが贈ったセーターも他人にあげてしまう男である。講演や著作物で得た収入もほとんど活動に使ってしまう。ハルとしては信者として生きていこうとするものの、本音では人並みの暮らしをしたいと思ったに違いない。こ

の普通の人間としてのハルの葛藤が中盤で描かれている。ここでの救いは熱心に活動に参加するボランティアの仲間や、ハルの母親や姉妹の存在だろう。ハルの一家は相変わらず貧乏だが、人々と助け合う精神を持ち合わせていた。作者はこうした曲折を経て次第に自立した女性に成長していく様を描いている。

ハルはその後豊彦の創設したイエス団の理事となる。平塚らいちょうや市川房江とも懇意になり、女性解放の運動にも関わっていく。『貧民窟物語』は新川での出来事を綴ったハルの初めての著作である。そして豊彦の示唆のもと覚醒婦人協会を設立し、代表と会報編集長を兼務する。他方では豊彦の講演会や著作などに関わる裏方仕事や金庫番を務める。その収入も奉仕活動に消えていくのだが。結婚し夫婦になっても心休まる日がない中、終盤でハルの女性としての喜びが描かれることになる。

この物語は太平洋戦争前の時点で終わっている。実際には戦後もハルと豊彦の活動は続いていく。その業績は神戸の賀川豊彦記念館や東京の松沢資料館などで知ることができる。最近では神戸市の小学校副読本に賀川豊彦が掲載されたという (本誌 No.40 浮網)。

ハルは昭和 57 年に 94 歳でこの世を去る。賀川豊彦もハルもいつしか名前を忘れられていく。しかし、忘れてはいけないことを後世に残していくことが今の世界には必要なのではないか。不肖筆者もこの本を読んでハルの生きた時代をあらためて振り返ることができた。富国強兵の名のもとにすすめられた近代化。持てる者と持てない者。文明開化と言われた社会と下層社会との対比。今の日本もそう変わらないかと・・・。

最後に、この本に出会えたことを作者の玉岡かおる氏、出版社の家の光協会に深く感謝いたします。